

思い過ごしかもしれないが、**被害者と同世代の若者の参加者が少ない**のが気になった。沖縄県で20歳の女性が殺害され、元米海兵隊員が逮捕された事件に抗議して、6月19日に開かれた県民大会のことだ。

参加者の声を聞こうとして会場を回ると、「子供に見せたいと思って来た」という親子連れはいても、若者は正直、探すのに苦労した。

話をしてくれた県内の大学院生（22）の2人組は、新聞に名前を書かれるのをちゅうちょした。

2人によると、友達と基地問題を話していても、**第三者的な立場をとったり、「自分は冷静だ」と言ったりする人が増えている**のだという。

本土の大学に通う友達とも交流があるそうだが、「びっくりするぐらい、**ネトウヨ（ネット右翼）のようなことしか言わない**」と嘆いた。

「普天間飛行場の辺野古移設に賛成とか反対ではなく、事件をきっかけに基地問題をしっかり見ないといけないと思って来た」と話していた。

これだけで「若者の基地問題への関心が薄れている」と一般化するつもりはないが、気になる。

翌日、元知事の大田昌秀さん（91）に会うと、同じような危機感を持っていた。「戦争体験のない若い人は、『沖縄が中国に取られるから米軍基地が必要だ』と言われると、信じてしまう」と。

だから「先輩たちがどんなふうにならなくなったか若い人に知ってほしい」と、先月、新著を出したという。

沖縄戦の元少年兵たちの手記をまとめた「沖縄健児隊の最後」（藤原書店）。沖縄、本土にかかわらず、特に若い人に薦めたい。沖縄の基地問題の歴史と現実から目を背けず、どうすべきかをじっくりと考えてほしい。